

My Page

Contents

- ▼重油回収に新しい動き
ボランティアが主体の
「重油災害加賀ボランティアセンター」
- ▼石川の地域づくりの未来を語りあう
「石川県地域づくり推進協議会研修交流会」
- ▼交流とネットワーク
〔内から外へ〕
- ▼地域レポート
地域の風土を変える活動の積み重ね
「ハーフドリーム能登」／「ねあがり応援団」
- ▼石川の地域づくり
〔アトランダム〕

石川県地域づくり推進協議会



情報誌
創刊号
準備



オクラ、なす、かぼちゃ、ごま、ビーマン、.....

畑には、実のなる花がいっぱい。

石川の地域づくりも

多様な個性が花開き、実を結んでゆきたい。



重油回収に新しい動き

卷頭
特集

ボランティアが主体の 「重油災害加賀ボランティア センター」

毎田雄一



1月2日のロシアタンカー沈没で始まった今年は、1月8日以来、県内各地でも重油回収作業が大勢の人々の手で続けられています。作業は沿岸の住民や私たち地域づくり団体はもとより、幅広い市民、行政、企業、自衛隊、各種団体などが担っています。その他、災害の規模の大きさもあって、全国からボランティアが駆けつけてくれています。行政だけ、また地元住民だけでも対応しきれない今回の災害では、広範なボランティアの力は頼もしい限りです。

ところが当初は、各市町村が設立した災害対策本部に受け入れ体制が整っていない、ということからボランティアの熱意を充分に活かせないこともあります。浮上してきた問題は、それぞれの役割とパートナーシップのあり方なのです。

タンカーの船首部分が漂着した福井県三国町では、「神

戸元気村」や「国境なき医師団」などのNGOのコーディネートによってボランティアセンターがつくられ、全国からのボランティアを受け入れると共に、地元の人材も育てながら作業が続けられてきました。

その三国ボランティアセンターの応援を得て、県内では珠洲市と並んで被害が大きかった加賀市で2月20日に加賀ボランティアセンターが発足したのです。以来、加賀市ではボランティアセンターが全面的に権限を持ち、行政はそれを後方支援する体制がとられています。そこで、全国から夜行バスで続々集まつてくるボランティアによって熱気にあふれる加賀市を訪れ、ボランティアと地元住民、市民と行政と企業とのパートナーシップの新しいあり方を見てきました。

(加賀ボランティアセンターは4月20日をもって活動を終えました。)

全国から届く支援物資の中には、企業が大量に提供したものも多い。



加賀市青年の家におかれたボランティアセンター。加賀青年会議所の守岡さんがセンター長を務め、全国との連絡業務や、支援物資やボランティアの受け入れを行っている。ボランティアの宿泊場所はここ以外にも、市内の寺院などが受け入れてくれている。



砂と重油を分離するふるい

作業には、全国から来たボランティア、地元住民、諸団体のほか、地元加賀市の高校生が結成した「ジュニア・ボランティア」も参加している。



海岸に沿って積み上げられた重油混じりの砂の山。重油がどんどん沈んでいくため、2メートルの深さまでの砂をふるいに掛けて重油を回収している。だが、砂の山以外にも、海岸のあちこちに重油のかたまりがたくさん散らばっているのが目に入る。



全国15ヶ所(東京、長野、名古屋、京都、大阪、神戸、岡山など。3月26日現在)からの無料バスなどを利用して駆けつけたボランティアの数は、1ヶ月で延べ6500名に達する。高校生や大学生など、若い人の明るく元気な姿が目立つ。



毎日行われるミーティングには、加賀市災害対策本部の人人が必ず出席し、出された要望事項には即座に対応している。



現地本部は塩屋海岸におかれている。現地本部長の土屋さんは川崎から来られている。「渉外や駆け引きは学生じゃ対応できないから」と、2月3日以来仕事を休んで重油回収に携わっているが、見ているととても楽しそうで、周りの人を元気にする力を持っている。

石川の地域づくりの 未来を語りあう

[石川県地域づくり推進協議会研修交流会]

初日



■日程／平成9年1月10日[金]・11[土]
■会場／いこいの村能登半島

テーマ

「石川型21世紀の地域づくりに向けて」

—市民によるまちづくりが新しい地域社会を誕生させる—

盛り沢山な内容でありましたがその中でも、初日の基調講演、実践報告、2日目の全体会議のエキスを紹介します。

もちろん、今回の研修交流会の目玉は分科会でおこなったワークショップでしたが、これは参加された方々の中にしっかりと残っているものと思います。

■基調講演

「21世紀を担う市民、
市民を支えるシクミ」



財団法人滋賀総合研究所 主任研究員
秦 憲志

「新しい淡海文化の創造」という県政のテーマが掲げられ、新しい滋賀県の文化をつくりていこうということで地域づくりに取り組んでいます。その中でも市民事業ということについて話をさせていただきます。彦根の主婦の方で吹きガラスをやっている人がいます。リサイクルのガラスを使って作っています。ご主人が退職される前に岡崎に通って勉強しました。そして、「退職金の半分を使って好きなことをやらせてや！」ということで窯を作つて始めたのです。ガラスは夢があるということで、公民館の体験教室や一般市民のガラス教室など、いろんな人が集まるようになっています。地元の酒屋さんから相談があり、グラスを作りセットで売り出したりとかしています。これは一つの「市民事業」だと思います。

このような事業を継続してやってゆくためには、運営するためのお金がいつたり、続けるための環境づくりが必要です。

長浜では空店舗が増えているので、店舗を借りてお惣菜屋をやつたり野菜を売つたりしています。ボランティアではなかなかできないので、支える仕組を作ろうとしています。

市民が地域を担う役割はますます大きくなってきています。そのような中で重要な課題は市民の活動を支える仕組のことです。

市民活動が沢山でてきていますが、続けてゆくためには、内容を高めていたり、次の展開につながることが必要です。のために、市民活動を育成する支援グループとかが出てきています。アメリカではインターミディアリーという言葉が使われています。

人的ネットワークの構築ということでは、地域づくりで会うことによって新しいものが生まれてきてている。そのような人的ネットワークが重要になってきています。拠点づくりについては、金沢では芸術村がスタートし、管理が市民の自主管理にまかされていてよいモデルになるのではないかでしょうか。

行政の役割については、非常に大きいと思います。交流の機会の創出とか、情報の発信など、側面的に応援するということで期待される役割は大きいです。



■実践報告…①

「静岡地域学会」の活動報告



社団法人静岡政経研究会 地域・産業研究所 所長
田中孝治

私たちの活動はしっかりした組織ができているわけではなく、腕の悪い建築家の家が増築、増築を重ねているようなものです。私たちの組織はコンサルタントでもなく、シンクタンクでもなく、終始応援団だと思っています。浜松のアクシティや静岡空港について知事に「提言」を行つてきました。

研究所を作る際に「静岡地域学会」を作つてみてはどうかと考えてきました。市民生活を考えると、行政のように縦割ではありません。これを研究対象や活動対象にする場合、総合的、学際的になっています。民だけでも横割組織を作ろうと思いました。

学会としての一番大きな活動は、あらゆる組織の人がよってたかつて一つのイベントを行なうということです。実行委員については、何でもいいから関わった人は全て実行委員にしてきました。地域づくりにおける私たちの役割はプロバイダーであるとられています。一つ一つの団体が独立性をもち、相互にイ

ンターネット的なネットワークを作り、学会はプロバイダーとしての機能を果たしています。

県や他の地域づくり団体との話し合いの中で条件を決めて地域づくり組織も作りました。条件としては次のことになっています。

- (1).会長を総務部長にしない
- (2).規約は3条でよい
- (3).入退会は自由にする
- (4).めんどうくさい事業はやらない
- (5).行政からもらえるお金は遠慮なくもらう

お金をくれるからやろうというのではなく、お金をもらう姿勢の問題です。

静岡県は先進地と言える程の状況ではないが、地域学会も今のところまだエネルギーを持っています。



■実践報告…②

新潟「やぶへびの会」実践報告



「やぶへびの会」**大滝 聰**

やぶへびの会というのは新潟県地域づくり委員会の愛称で、最初に7名で始めて現在14名います。「歎をついて蛇を出す」という言葉はあまりいい意味には使われていませんが、新潟では、陰で眠っている地域の宝物を掘り起こす人間になろうということで、「やぶへびの会」という名前がつきました。この会の特徴はまず自由な組織になっているということです。会員名簿もないし、行政の方も裏方に徹してくれています。今地域づくりに必要なことは何かということを、自主的に考えて行動しています。とにかく集まること自体が楽しい会なのです。

最初に行ったことは、新潟の地域づくりをまとめた情報誌づくりでした。現在は「やぶへびひろば」というタイトルで隔月発行しています。ワークショップで編集作業を行い、準備号を4回発行し、本号が出たのはやっと昨年です。

情報誌を作つてみたら、各地から情報が集まり、地方で何が求められているかがわかりました。中でも気になったのは、地域づ

くりをしたいという意欲はあるがやり方がわからないという情報がいくつかありました。そうした要望に応えるべく、次に「まちづくりコーディネーター養成講座」を企画しました。講座では、問題解決学を縦軸に、ワークショップを横軸にした考え方をしています。問題解決学でまちづくりの組み立てや考え方などを学び、その場面場面での進め方はワークショップを体験しながら学びます。70ページもあるテキストも、やぶへびのメンバーで作り、講師も自分たちが行なっています。

3月には型破りの大きなまちづくりシンポジウムを開く予定です。さらに、来年6月にオープン予定の、新潟の東京インフォメーションセンターとどうリンクさせるなども考えていかねばならないと思っています。

ゆくゆくは行き詰まつてくる可能性があるので、“いもづるの会”というのを“やぶへびの会”的に作りたいと考えています。

石川の地域づくりの 未来を語りあう

[石川県地域づくり推進協議会研修交流会]

2日目



■全体会



●コーディネーター
金沢大学経済学部教授 佐々木雅幸
●パネリスト
「静岡地域学会」
「ひと・まちネット滋賀」
新潟「やぶへびの会」
石川県地域づくり推進協議会
田中孝治
秦 憲志
大滝 聰
坂本 勝
大湯章吉
每田雄一

佐々木 協議会が3年続いたので本格的な組織が出来るきっかけは出来たのかなと思う。このような活動は自発性が大切で、自主的な団体の活動は全世界でブームになっています。自主的な集まりが誰にも頼まれず、依存せずに活動してゆく動きが出てきます。活動領域が広がってくると、ネットワークが広がり、専門情報が必要になり、センター的なものが求められてきます。一人一人の市民がセンターとなり、一人一人が情報を発信していくんだという、そこがポイントです。これはマルチメディアの世界ではコンテンツと呼ばれます。コンテンツが一番大事で、個性的なコンテンツを持っている個人やグループが、互いに交流し合う社会、これが来るべき21世紀の社会です。

夢がなければ人は動けないわけで、人材を引き付ける夢、コンセプトが大切です。質の良い情報と夢があつたら人材が呼べる。資金計画はその後です。事業の企画があって、アイデアがあって、夢がある。そこにお金が流れてくる仕組を作る。それがセンターだと思いました。

まずパネリストの方に、昨日、今日の感想なり、石川型の個性

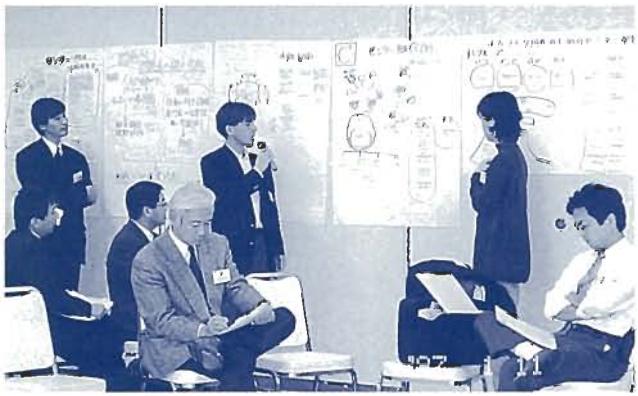
的な地域づくり協議会なり、こういう団体の在り方について率直な意見から聞かせて下さい。

秦 京都で、みんなで家を作ろうとコーポラティブ住宅を進めています。12世帯ぐらい集まって、借地型でやろうということで、やってゆくと町中にコミュニティを作つてゆきたいという夢がふくらみます。いろんなメンバーが入ることにより、どんどん広がつてゆきます。こういう協議会でもいろんな人が入ってくることにより、広がりが生まれてゆくのではないかでしょうか。

田中 必要は発明の母、無理難題は発明の父という感じがするんです。そこで必要性があるかないか、だけどこれは難しいぞということになると、無理難題が一つのエネルギーになっていくという意味では、母と父があつて子供が生まれると、生まれたものはいずれ死ぬという覚悟をしたほうがいいんだと思います。立ち上げる勇気とやめる勇気を持つ、つまり、やめる勇気を持つ瞬間、組織運営は非常に楽になるんですよ。

金のことについては、私たちも悩んでいます。奇麗事ではすまない面があるので、経験的に言えるのは、お金というのは、常に





後から付いてきた、付いてくるものだと思います。お金もらいの重要なポイントは、思い入れは必要ですが、思い込みでは人はお金を出してくれないということです。思い込みだけで動いていいのではないかをチェックする意味でも、ネットワークを作り、仲間を作る必要があります。

大瀧一つは考えるという作業そのものを考える必要があります。

最初は理念設定をします。まちづくりであれば、テーマを明確にする。考える目的を決める。次に、現状把握を行います。それから、未来予測を行い、まちの将来像をビジュアル化します。それから、方針を立てる。最後に手順編成を行い、いつごろまでに何を行うかを決め、スケジュール表に落とします。情報については、KJ法みたいな方法で集約して加工する。加工すると新しい情報として生まれ変わるもので。新しく作り出して初めて価値が生まれます。大切なことは、石川なりの情報を生み出していくことです。

佐々木県外のアドバイザーの意見も踏まえながら、発言をお願いします。まず坂本さんから。

坂本石川型といつても、個人個人の気持ちがあつて初めて形が出来ます。まちづくりと言つてもいろんなパターンがあるし、いろんな分野の人があります。多岐にわたるものを一括りにしようとしても難しい。最低限これとこれがあればいいよというものを作りたい。ボランティアに対するボランティアみたいなものが必要なのかも知れません。

秀田総体としての大きなことを語るよりも、一人一人のことを本音で語ることが求められているように思います。私は小松のコマニーという企業の社員です。私のベースは企業にあると思います。私がなぜまちづくりにこだわるのかと言うと私が企業にいるからです。私は、企業と社会を結び付けてゆくことをしたい。企業にとっても大切なのは生活者としての感覚をもつてゆくことです。

身近なところから始まるまちづくり、住みよい地域づくり、生活環境を良くしていくという市民グループが沢山出来てきます。タイアップしていくことが大切ですね。

大湯ワークショップを通じて思ったことは、各々の団体の問題を取り上げてゆけば、解決できることも多いのではないかということです。

システム部会長ですので、ここでアンケートを取らせていただきます。挙手でお願いします。センターは

- ①是非必要である……………12名
- ②まああつたほうが良い……………26名
- ③必要でない、まだ分からぬ……………5名

その他はございませんか。

番外編で「必要だと思うけど、スタッフに入るには困る」。

私も手を上げていないのですが、「気付いたらセンターだった」ということで。これがおとしどろだと思うんですが。

中正センターということで集中するのではなく、ネットワークづくりを明確に出来るセンターを作っていただくとよい。そろそろ、時間を区切ってやっていただきたい。

佐々木1年という時間を区切って、次の時にはきちっとしたものが出来るようにしたい、というのがみなさんの意見だと判断してよいでしょうか。

田中センターでなくても何でもいいのですが、コアになる人はいるのです。これから先、一步前に進めるると、誰がコアになるのか、資金はどうするのかが現実的なシミュレーションとして考えてみる時期にきている。

浜先日、ゴア副大統領の演説を読んでいたのですが、マハトマ・ガンジーの言葉を引用しているんです。「あなたが世界の中に変化を見たいと

望むなら、あなたが変化になりなさい」と。今まで、住民は行政に対して私のために何をしてくれるんだと要望し続けてきた。これからは自分が何ができるかということを考えないといけない時期にきている。

佐々木おそらく1年以内にはセンターについては明らかなものを作つてゆきたい。



交流とネットワーク

内から外へ

地域づくりは地域内のネットワークづくりと

連携が求められるとともに、対外的なネットワークづくりも不可欠です。

自分たちの活動を相対的に見つめる機会となるとともに、良好な刺激と支援が得られます。

この間、全国に出かけてきたメンバーからのレポートの数々です。

交流した団体や参加した事業によりトーンが違いますが、多様な活動の一端をつかんでください。

「かながわ県民活動サポートセンター」●大湯章吉

ボランティアの活動拠点

かながわ県民活動サポートセンターは、県民のボランティア活動が生き生きとして、力を蓄え、新しい時代を創造する原動力となるよう総合的に支援する目的で、平成8年4月に公設公営で設立された。

センター機能として、場、情報、ノウハウを段階的に提供する計画を進めている。現在、場の提供として、センター内に情報・相談コーナー、ボランティアサロン、ミーティングルームが設置され、年末年始を除き年中無休で、午前9時から午後9時まで開館している。年間の事業費は、施設管理費や人件費を除くと約3,500万円で、職員総数は24人である。

利用団体から喜ばれているのは、私書箱的な役割をもつ団体レターケース(432個)、ロッカー(大30個、小120個)、活動内容をアピールする展示コーナーである。また、テレビ、ビデオ、OHP、ビデオプロジェクター等が無料で貸し出されている。

管理運営にあたっては、自主的な活動を助長する

ため出来る限り規制はしない方針であり、利用上で生じた問題は、利用団体の総意で解決する方法をとっている。

行政が運営するセンターは、税金で賄っている関係で管理が難しいと思われる。また、職員とボランティア団体との波長が合いにくいと思われる。しかし、視察したときの感触では、熱意に満ちたスタッフが立ち上げたためか、スムーズに行われていた。しかし、行政には人事異動があり、公設公営センターの今後の大きな課題であると思われる。



実践先行型のやぶへび

コアメンバーが自由に活動している新潟「やぶへびの会」。昨年12月に情報部会のメンバー有志で新潟まで出かけてきました。やぶへびの会という変な名前で活動しているグループのメンバーと交流することと、ニューにいがたという財団の活動内容を把握するためです。

■何となくスタートしたやぶへび

平成7年9月、(財)ニューにいがた振興機構の審議会的な役割を担ってスタート。当初は7名で現在は13名に。最初のメンバーは財団の事務局で独自に抽出し、依頼。その後はメンバーが新たなメンバーを連れてきている。県下の地域づくりグループの核になるネットワークとしての機能を期待されているようです。まず、情報収集の意味で、情報誌を作ることから始める。「やぶへびひろば」として、年に数回発行。準備号、実験号を何回か発行しており、発行時期もそれほど定期的でない。活動の自由さがこんなところにも現われています。

■企画開発が得意なメンバーたち

メンバーの職業はばらばらであるが総じていえることは、印刷や企画、制作関係の仕事をしている人が多いことが特徴か。やぶへびの会の活動に対してはたいした報酬は期待できないが、その他の面で、お仕事はありそうでもある。単純なボランティアでは続かないと考えられるので、ゆるやかな関係性がよいのかも知れません。

■刺激的なつながり

メンバーたちがおっしゃるには個々のメンバーが面白いことが最大の魅力のようです。確かに、個性的で自由に生きているなという印象を与えてくれる人達ばかりでした。それに事務局を担当している財団

の斎藤さんや平松さんもユニークな存在です。

ものごとの進め方もやぶへび、いもづる的で、適当に広がってゆく。月1回の定例会が刺激的な議論の場になっているようです。それと、手法として「ワークショップ」を多用していることも特長です。

情報誌の編集企画もワークショップでまとめていり、コーディネーター養成講座の中心もワークシヨップになっています。

■ニューにいがた振興機構は地域づくりセンター

「食と緑の博覧会」の益金を基に、県産品の普及伝のために設立された財団であるが、平成7年から地域づくり支援機能を含めることになり、県と連携しながら地域づくり事業を推進している。県の地域政策のソフト事業を中心に行っている。その中心は次の2つ。

1. 地域づくり活動活性化支援事業

新たな地域づくり活動に対し2年間助成金を給付。活動団体に対するアドバイザー派遣は県外講師も含め多くの人材が登録されており、かつ登録されていない人でも柔軟に対応している。

2. ネットワークづくり

県内の地域づくり団体の交流のために年に1~2回、交流大会を各地で開催。地元で実行委員会を組織して行う。財団からは50万円程度を支出するのみで、後は参加者の会費等でまかなう。情報誌「やぶへびひろば」もネットワークづくりのために発行している。しっかりした財団があり、やぶへびの会という緩やかなグループが核となり、自由に企画を立て、地域づくりに必要と思われるこことを実践している。新潟は私たちのよきモデルの一つです。





〔滋賀・兵庫リポート〕●赤須治郎

サポートセンターや 人ネットワークが全国各地で

平成8年度は
「センター」「ネットワーク」「情報誌」の
3つのテーマを掲げ、
地域づくりを推進する仕組みや方法を
協議してきました。
その一環として昨年12月に
滋賀県と兵庫県を視察しました。
滋賀県ではネットワークづくりを、
兵庫県ではセンター構想について、
それぞれ第一線で活躍の方から
お話をうかがうことができました。
その報告です。



滋賀県のひと・まちネットを 束ねる人たち

滋賀県は昭和50年代から「草の根まちづくり」が行
われてきた地域づくりの先進地です。ここでは、「ひと・
まちネット」の幹事である織田直文さん(滋賀文化短
期大学教授)、大平正道さん(風と土の会事務局長)に
会いました。

「ひと・まちネット」は平成7年6月に発足しています。
県内各地で活動している団体・グループ・個人の相互
交流の場として、約80名が参加してできあがりました。
大平さんのような地域づくりのリーダーや学者、自
治体職員などで構成されています。年2回の交流会
とニュースレターの発行が主な活動で、年会費
3,000円で運営されている市民団体です。

会員が全県にまたがって参加しており、様々な分野
の団体の横断的組織であるため、このネットワーク
には、かなりの情報が集まっているように思えます。
幹事たちの多くは、各種の協議会や委員会の委員を
兼任しており、「ひと・まちネット」の存在が、滋賀県
の地域づくりの強力な応援団になっているようにも
思えました。

それにしても、ネットワークを束ねる人たちのなん
と魅力的なことでしょう。織田さんは学者というよ
りは「頼りになるおじさん」という感じで、話にも説
得力があります。大平さんは信楽町の人ですが、「信
楽焼の理」を思わせる柔軟な風貌で話好き。人ネットは、
そこに参加しているメンバーの人柄に、大いに左右
されるものようです。

滋賀では、淡海文化推進室の阿部圭宏さんからサポ
ートセンター設立の話も聞きました。平成9年から
スタートしますが、その報告は別の機会に。



CS神戸は被災者の職づくりを始めている

兵庫県では、県生活文化部のボランティア活動支援担当の竹村幸男さんにボランティア活動支援センターの構想について伺い、その後、神戸市東灘区にあるコミュニティーサポートセンター神戸(CS神戸)を案内していただきました。

ボランティア活動支援センター構想は一冊のリポートにまとめられている長大なものですから、全部を説明することはできません。気がついたことを2点あげるなら、ボランティアを福祉など特定の分野に限らず、市民公益活動というような広い意味でとらえていることと、もう1点は、この構想自体を民間の委員に最初から考えてもらったことです。従来なら県が原案をつくり、それを委員が検討するスタイルになりますが、これはそうしなかったと言います。民主導のセンターを本気で考えているなあと思いました。さて、CS神戸は東灘区魚崎にありました。幼稚園の隣の狭い土地に立ったプレハブの事務所と作業所です。バザーが開かれる前日でしたので、ボランティアの

方が忙しく準備している最中に伺いました。

神戸では、震災以降、ボランティア活動が様々な展開を見せているようですが、CS神戸では、被災者が地域社会に復帰できるように、仕事づくりを手がけていました。被災者の中には、地域との接点がなくなってしまい、仮設住宅に閉じこもる人も多く(特に男性にその傾向が強く、アルコール依存症も見られること)、彼らを外に連れ出すために、仕事を与えるという構想です。

しかし、新規事業開発などは、市民団体がこれまで手がけたこともなく、中小企業診断士のような専門家のボランティア参加を呼びかけていました。

ボランティアの最前線では、本当にいろんな取り組みがされており、決してワンパターンにはなりません。その発想の豊かさにこそ、市民活動の本領があります。センター代表の中村順子さんのバイタリティあふれるお話をうかがいながら、それを実感しました。





自治体と市民セクターの 協働の可能性

〔第10回自治体学会・沖縄大会〕●毎田雄一

昨年10月、自治体学会・沖縄大会に参加しました。私が出た第5分科会は、市民活動団体がNPOとして整備されることの必要性と、それを支援する各地の支援センターの事例や構想の報告です。

米国では、地域における継続した市民活動の団体であるNPOは、社会を構成する重要な3番目のセクターとして社会的に認知され、その活動は法的にも保証されています。近年、市民団体やまちづくり専門家による米国NPOの視察や研究が盛んになり、その実情が様々な機会に国内で報告されることが多くなりました。とりわけ、一昨年の阪神大震災以降、より注目されています。



継続した市民活動を育て 支援するセンターの必要性

センターの報告は、神奈川県、兵庫県、沖縄県などから行われました。

神奈川県においては、すでに「かながわ県民活動サポートセンター」が昨年4月、県によって開設されました。延べ床面積約3,000平方メートルの施設の中に、「ボランティアサロン」「情報・相談コーナー」「ミーティングルーム」などを設けたこのセンターは、「活動と交流の場の提供」と「活動の支援」の2つの機能を果たそうとしています。

このセンターは、県が設立し県の職員が24名働いているのですが、「県民が主役で、行政は黒子に徹する」ということが、運営の基本です。つまりそこでは、行政は市民を管理・監督するのではなく、支援する立場に立っているのです。

また、まだ構想段階にありますが、兵庫県が進めている「ボランティア活動支援センター」は、「公設民営」というスタンスを目指して、市民・学生・企業に対する意識啓発や、指導者の養成研修に取り組もうとしています。

沖縄県でも、センターの設立のために市民団体の調査を行っています。

石川県においても、私たち地域づくり推進協議会は、センターの設立と市民セクターの育成・支援のための取り組みを更に前に進めていきましょう。



地域づくり運動の再生をさぐる

14日午後、初日の会場焼津市文化センターに到着。さっそく小桜義明氏(しづおか未来づくりネットワーク代表幹事・静岡大学人文学部教授)による「転換期の地域づくりと官・民の役割分担」と題した基調講演を聞くことができました。講演の中で、地域づくり運動の再生の方法が挙げられていました。村おこしとして地域特性の見直しを図り、市場システム(特産品)においての生き残り、そして地域産業の活性化など「住民の自助努力」と「住民と産業の相互扶助」によって活動を推進すべきであること。課題としては、行政依存からの離脱や、地域づくり運動からの起業創業による地域間競争より地域間協調による共生などでした。

また、まちづくりとしては、多種になってきている生活関連公共投資に対する共同システムと公共システムのあり方が大切であるとしていました。対応策として総合的都市づくりを目指しての異業種交流と行政との対等及び平等な関係維持、都市づくり運動相互のはみ出しによる課題別・地区別・系列別の分散の克服、地域づくりでの半日制住民(従業員)の力を企業の地域づくり運動参加促進による全日制市民の限界克服などを挙げておられました。

そして、次に行政の支援体制を「金と力」から「情報と人脈」による住民合意型行政へ移行させることを提案されていました。

続いて全国の実践発表として6事例があり、石川県女性センター館長の谷内氏の発表もありました。そしてその6つのテーマの分科会があり、私は「住民参加」がテーマの分科会に参加しました。静岡県長泉町商工会青年部の皆様によるイベント「長泉フォーラム」の経験を活かした発表のあとで、約40名の分科会参加者が自己紹介を兼ねて一言ずつ意見を出しあう形で進められました。全員が発表したと

ころで時間切れとなり、もう少し時間があればと残念に思いました。

そして主催地区の間で活動しておられる「志太ミニュージカル」を見せていただきました。特色はメンバーを公募して、スクール制とし、1~2年で交替させることです。それによってより多くの理解者を創るようでした。



地域レポート 1

[地域の風土を変える活動の積み重ね]

県内各地には、地域を良くしようと楽しみながら自発的活動を手がけているグループが、沢山あります。それらの元気でユニークな活動は、協議会の内にも外にもあります。本誌では、毎回様々なグループとその活動を順次紹介します。

今回取り上げるのは、それぞれ穴水町と根上町で活動しているグループで、「ハーブドリーム能愛」と「ねあがり応援団」と言います。

「ハーブドリーム能愛」は、東京など地元以外から穴

水へ嫁いできた女性たちが、ハーブの栽培から製品づくりと販売までを行なながら、まちをハーブでいっぱいにしたいと夢を膨らませています。でも、いつまでたっても「よそ者の道楽」と見なされているのが悩みです。

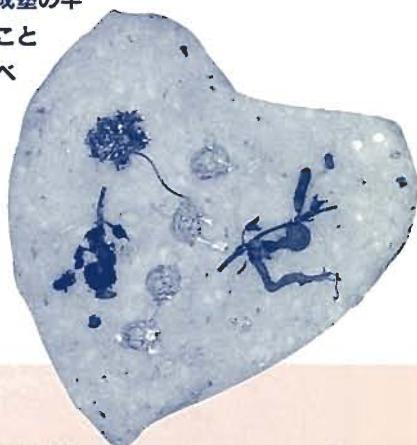
また「ねあがり応援団」は、根上町の人材養成塾の卒業生たちでつくったグループで、塾で学んだことを活かしながら、町に対する提案や楽しいイベントに次々と取り組んでいます。

(每田雄一・ワークショップIN小松)



奥能登のさわやかな風 「ハーブドリーム能愛」

【連絡先】
風呂郡穴水町大町2-48
〒927 (二谷むら子)
TEL0768-52-2859



のと鉄道穴水駅前で毎週土曜日開いている「ハーブドリーム能愛」を訪ねました。窓の外は雪なのに、部屋の中は春の野の日だまりの匂い。肩の力がスッと抜けて、すっかりリラックス。

ハーブのドライフラワーが天井から吊され、棚にも壁にもハーブを使った製品が所狭しと並べられている。

一口にハーブといっても、現在栽培しているのは約60種。そのままハーブティーにしたり、ケーキやクッキーに入れたり、肉の臭み消しなど料理に使う他に、ポプリや入浴用として、幅広く使われている。また、その香りと

共に殺菌効果や引き締め効果・リラックス効果を利用し、アトピーにも効く化粧石鹼も作る。

ただ、実働4~5名で、栽培から製品づくり、ラッピングまで手がけており、特に夏の畑仕事が大変との事でした。また、町の人たちに受け入れてもらえない事もあるそうです。

でも、穴水の町をラベンダー通り、バイナップルローズ通りといった、ハーブでいっぱいの町にし、子供が誇りに思える町づくりに取り組みたいと、目を輝かせていらっしゃいました。

(林弥子・まれびとビア懇話会)





「子供たちに自分の生き方を見てもらいたい」と 頑張る能愛の人たち。

能登という田舎の特異体質なのか、とにかく他から嫁いできたとなると、いつまでも他所者扱い。この情報化社会においても、理解しあうというのではなく、無責任な批判をし、すぐ横やりを入れる。これを生き甲斐としているのだから面倒なものだ。おまけに女性がなにかしようとすると、好奇の目にさらされる。

同じ能登に住む人間として、これは運命だと思います。退屈している人たちの一種の情報提供だと思えば、ちょっと刺激的だけど楽しいですよ。

ハーブの魅力に出会うと、香りからか、その人の考え方から感受性まで変える力があるという。男性は理論理屈で目的志向的発想を得意としているようですが、女性はもっと感覚的に物事を捉えます。ハーブに囲まれていると、その部分がもっと磨かれそうです。

能愛の人たちは、きっと狭い人間のこころを安らげ、くつろがせ、癒すことができるのではないでしょうか。
(中野文枝・じんのひ悠人)



揉んで捏ねて

石鹼作り体験記

石鹼作りには、溶かす、固める、など手間がかかるのかと思ったが、意外にも短時間で手軽にできた。まず、ハーブの効能の説明があり、一人3gの約束に「多い」「少ない」と騒ぎつつ、それぞれ自分の好みをブレンドする。楽しい一時。(3種類ぐらいが良いらしい)

普段から力が有り余るK嬢、容器を壊したり袋を破くハプニングで一同を笑いの渦に巻き込んでくれる。ハーブ液を抽出する少しの待ち時間に、ハーブティーとクッキーのもてなしを受ける。これがまた柔らかな色合い、優しい香り、視覚、味覚……共に満喫。

抽出液と液状石鹼を十分に混合させるため、揉んだり捏ねたり……。誰の形が“ああだこうだ”と賑やかに会話も弾み、最後の仕上げ。粘土遊びの要領で形を整えるが、やり直しがきく事も気楽。「いびつなのもまた、味わいがある」と、皆、結構満足げ。スタッフの方々から、積極的に町おこしを実践している様子が伝わり、ぐうたら生活の自分を反省する。

また訪れてみたい！そんな気にさせるのは、美味しいティーとクッキーのせいばかりではない。私たちのように小グループで賑やかに作るのも楽し。またカップルで参加するとことさら……のはず。

ハーブ石鹼できれいになる！という期待感と思い出を持ち帰った。
(砂山芳子・志賀町国際交流の会)

地域レポート 2



企画と実践のパワー集団 「ねあがり応援団」

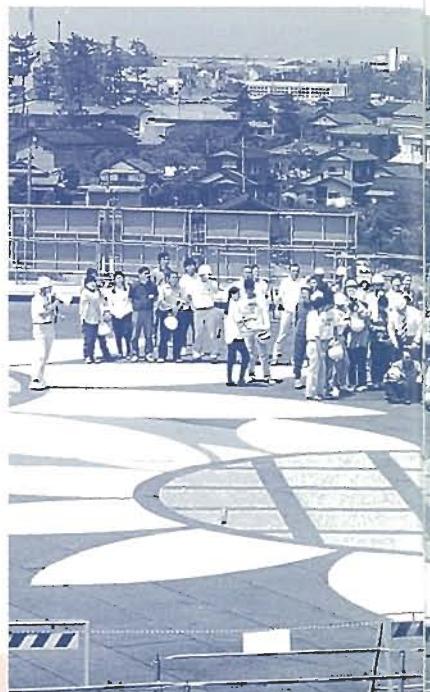
【連絡先】
能美郡根上町中町る88
〒929-01(中川 真)
TEL0761-55-1774

ねあがり応援団は、平成4年に設立され、町に対して100の提案というユニークな活動を中心とした地域づくり事業の企画と実践を行っている会です。今回は、会の代表の喜多さんをはじめ4名の執行部の方に、重油流出騒動の大変お忙しい中お集りいただきました。会の紹介や根上町の魅力についてお話を聞かせていただき、最後に海岸や松井秀喜記念館などを町内ウォッチングとのことで案内していただきました。

この会の発足のきっかけは、平成2年度に町の呼びかけによる「ねあがり創成塾」なる人材育成事業があったことです。そこで2年間の研修を終えた卒業生の有志が、研修で得たことを実践しようと結成されたのです。現在会員は44名、うち女性13名で構成され、特徴的なのが、役場職員が15名いることです。この人たちが町とのパイプ役となったり、事務的な部分の中

心となることにより、活動の準備や運営がスムーズに運んでいるとのことでした。

活動のいくつかを紹介します。まず、毎年1回町長とのフリートークが行われ、その場で最初に紹介した100の提案がされています。その内容は、文化・教育・福祉・健康・産業・観光・人材・応援その他に分類され、進捗についても毎年総会で評価し、追加されているようですし、これが活動のスタートであり基本のようです。具体的には、20年ぶりにオープンした海水浴場の記念として「夕焼け日本海感謝祭」を開催したり、町内の文化遺産を発掘し、整備しての「根上ふるさと五十三次」街道開きへの企画、実践活動など、地域おこし事業です。先進地との交流や視察も積極的で、穴水町のハーブドリーム能愛をはじめとし、島根県出雲市や山形県三川町、三重県島ヶ原村などと交流を持ち、それ





が縁で山形県での「全国方言大会」に参加したときには、方言を使って石川の郷土を紹介したそうです。

さらに地域向けたソフト事業として、「クラシックコンサート」を開催したり、文化会館円形ホールの屋上に「私たちから太陽へのメッセージ」事業と銘打って、巨大なひまわりを描いて、上空を飛ぶ飛行機の客に根上町をアピールするなど、ユニークな遊び心いっぱいです。会員が楽しく意義のある活動を展開している様子が、説明していただいている様子からも十分にうかがい知ることができました。

こんな会の苦労といえば活動資金の調達だそうで、あるときのコンサートでは大きく赤字が出て会員のカンパ(打ち上げの会費を過大に徴収)で切り抜けた苦い経験もあるとのことで、資金集めには会長さんに頼るところが大とのことでした。もう一つの悩みは、40代後半が主力であるため、後継者の育成も今後の課題として検討中だそうです。

こうして3時間近くにも及ぶ取材を通して感じたことは、根上町は、まず人材が豊富で(人口の昼夜率がほぼ同数)企業が町内に存在するため若者が多く、町長さんをはじめとした行政の理解もあります。各種事業にも住民や企業の自主的参加が増えている様子を聞き、会の活動の成果だと思うと同時に、根上町の環境の素晴らしさを羨ましく思いました。さらに今後は、もう一步踏み込んだ視点から、素晴らしい提言の数々を実践に移していくための取り組みができれば、根上町全体がもっと素晴らしい活力ある町に生まれ変わるように思えて取材を終えました。

最後になりますが、皆様の活動の参考に是非、ねあがり応援団の100の提案を一読されることをお勧めします。

(山田一二・内川の自然と未来をつくる会)



ねあがり応援団

取材感想

まず、ねあがり創成塾の卒業生が主体となって組織されただけあって、キッチリと問題意識をもって事業に取り組んでいる姿が、はつきりと感じられた。

現在やらなければならないことは、現在やる。

そんな意気込みと、用意周到な準備と、明確なターゲットの絞り込み。それらを分析し、議論の中から作りあげるエネルギーに思わず唸らせられた。



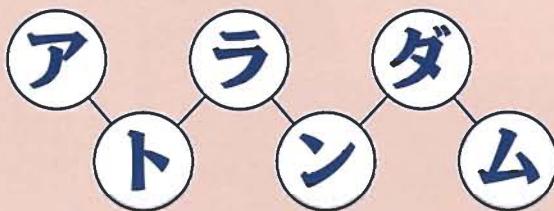
特に、目立ってはいないが、リーダーの存在も大きいと感じました。いろんな場面で意見をまとめたり、役割分担の指示をしたりと、その存在は、会の結束を固める上で重要であると思う。

また、行政職員もメンバーになっているのも大変よいことだと思う。地域づくりは、行政と住民が協力し合ってこそ、できるものだから。我々の会でも、町職員の方がメンバーになっているが、つい事務処理や連絡以外にもおまかせ的になる傾向があるので、相互に注意が必要であろう。

いずれにせよ、何事も人任せではなく、自分たちが率先して物事に取り組んでいく姿勢を今後とも続けていれば、どんな形にせよ、良い結果が残っていくと思う。

(飼村 雄一・はりんこ塾)

石川の地域づくり



■安宅まちづくり21 [小松市]

連絡先:古梅 進 TEL0761-24-2181

歴史と伝統の町・安宅、日本海や梯川の自然に恵まれた安宅。

この貴重な財産をもとに、まちづくりを考えています。



■一歩の会 [珠洲市]

連絡先:吉原忠男 TEL0768-87-2222 (大谷公民館)

◆年間活動計画

ラブ・リバーデー(大谷川を愛する日)

毎月第一日曜日

大谷川鯉のぼり川渡し
(4月25日～5月10日)

大谷川鯉のぼりフェスティバル
(5月3日・4日)

市の花 薔薇の保護育成(年間)

平大納言・平時忠の寸劇
(大谷地区文化祭 11月)



■内川の自然と未来をつくる会 [金沢市]

連絡先:山田一二 TEL0762-41-3065

地域おこしの活動として“内川”という地区をもっと多くの人に見て知ってほしいをテーマに「鎮守の森ギャラリー」というイベントを開催し、作家や地域の人、見学者が一緒に楽しみ、見ることにより、地区が一つのギャラリーとなるよう、展開しています。

◆毎年11月上旬 「鎮守の森ギャラリー」開催

■金沢みなど・大野まちづくり21 [金沢市]

連絡先:中村正勝 TEL0762-67-2627

◆目的

金沢の海の玄関口に
ふさわしいまちづくり。

◆活動

1.歴史的街並みを保存しつつ、
魅力ある街並みの創出。

2.歴史・文化・水辺等の
魅力活用イベント開催。

3.水辺美化活動とマナーを
よくする啓蒙活動。



■旧御蔵町町内会 [内浦町]

連絡先:南山芳郎 TEL0768-72-0537

きまりも制約も一切ありません。

町内会を横断する全く任意の団体。

会員も10人位。

祭りやイベントを盛り上げるために協力しています。



■小松市国際交流協会 [小松市]

連絡先:協会事務所 TEL0761-21-2226 FAX0761-20-1266

◆情報ダイアル

TEL 0761-23-6600

◆インターネット

<http://www.nsknet.or.jp/kia>

外国人労働者への日本語講座、市民への国際交流の場の提供、会員の間での国際交流の質の向上等々に幅広く活動中。



■春蘭の里実行委員会 [能都町]

連絡先:「春蘭の里実行委員会」事務局 TEL0768-67-8001

地域の活性化のため、平成8年より、私たちは自生する春蘭をメインテーマに自然をまもる、村おこしをはじめました。

只今、会員募集中！



■七尾マリンシティ推進協議会 [七尾市]

連絡先: TEL0767-53-8241

「小さな世界とし・七尾」を目指したまちづくりを展開しています。

◆当面の活動目標:能登国際テント村'97[春編]
5/4、5 能登食祭市場周辺

第12回アメリカ研修の参加者募集中

期間:6/25～7/6

費用:65万円(予定)

■ねあがり応援団 [根上町]

連絡先: TEL0761-55-1774

参加して楽しい町づくりを目標にイベントを中心とし活動

◆今後の活動予定
月例会:毎月第2金曜日



■ねあがりカラーライダスcope [根上町]
連絡先:谷口健一 TEL&FAX 0761-24-4339

国際化の中での地域の見直し作業を通して、世界とのふれあいをすすめています。

- ◆ティ&トークセッションの開催
- ◆会報の発行(希望者には送付可)

WELCOME TO NEAGARI !



■はりんこ塾 [美川町]

連絡先:中正 進 TEL0762-78-2177

美川の自然環境保護を通してまちづくりを考え実践している。

はりんこの名称は淡水魚のトミヨに由来する。

◆今後の活動予定

- ・定例会:毎月第二水曜日
- ・夏休み中:自然観察会
- ・イベントなど視察訪問(随時)



北陸中日新聞 提供

■ふるさと21青年塾 [田舎浜町]

連絡先:塾長・先川孝一 TEL0767-68-3838

◆今後の活動予定

- ・ふるさと写真コンテスト(2月~9月作品募集)
- ・座禅会(5月11日 東嶺寺)
- ・夢マップ立体化構想
- ・人づくり講演会(定例会)



■平家の郷構想研究会 [珠洲市]

連絡先:TEL0768-87-2222(大谷公民館)

地域おこしのため、平時忠郷墓所を中心に、郷づくりを進めている。

◆今後の活動予定

- ・散策道の整備(案内板等を立てる)
- ・鯉のはりフェスティバルに参加
- ・赤米・黒米栽培
- ・文化祭に参加
- ・句碑の建立

■能登乃國ゆするぎ塾 [鹿島町]

連絡先:大湯章吉 TEL0767-77-1584

靈峰「石動山」のPRや、コスモス畑づくり、そば打ちなど、多彩な活動を展開中。遊び心でまちづくりに取り組んでいます。

メンバー募集中!



石動山「旧觀坊」での夜なべ談議→

■フォーラムふるさと塾 [珠洲市]

連絡先:TEL0768-82-0023(珠洲市立中央公民館)

町づくりは人づくりを第一に、見て聞いて実践して、考えるグループです。仲良く、楽しくがモットーです。

◆今後の活動予定

- 3月 救急法教室
- 4月 車椅子体験
(バリアフリーを考える)



■ペイエリア珠洲推進協議会 [珠洲市]

連絡先:TEL0768-82-0658(珠洲青年会議所)

海を活かしたまちづくりのために、イベントや先進地視察を行い、将来への提言活動をしています。

◆今後の活動予定

- 8月 イベント
- 10月 先進地視察



■(社)松任青年会議所 [松任市]

連絡先:TEL0762-76-4884(松任青年会議所)

20~40歳までの青年の集まりで、明るく豊かなまちづくりの実現に向けて、頑張っています。興味のある方はご一報下さい。

◆今後の活動予定

- ・環境に関する事業
- ・父と子の体験事業
- ・国際交流事業など



■まれびとピア懇話会 [加賀市]

連絡先:林 弥子 TEL07617-3-1865

まれびと(客人)との交流で町に活力を!!

◆今後の活動予定

- 5月10日 「元気な町づくり」講演会
- 8月 「音と炎と蔵まつり」
- 8月23.24日「パソコン講座」
- 10月5日 ふるさと探訪
「まれびと達の遺産=加賀文化」



1996.2フードピア金沢in加賀→

■ワークショップ IN 小松 [小松市]

連絡先:每田雄一 TEL0761-21-1014

2月22日(土)小松での「女性が語る身近な暮らしから考えるまちづくりワークショップ」。只今、記録集を作成中です。

◆今後の活動予定

- 10月 日本海をテーマに暮らしと元気な地方づくりを考えるイベント



インフォメーション

地域づくりにも
インターネットを

インターネットで
地域づくりについての
情報を得ることができます。
その例をいくつか紹介します。
アクセスしてみて下さい。



<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

地域づくり団体のひろばや
地域づくり活動事例集のコーナーあり。



<http://www.nsknet.or.jp/~rex/index.html>

日本全国の市町村のホームページに
リンクが設定されている。



<http://www.nippon-net.or.jp/japan.html>

地域公共団体に関する情報の全国ネットワーク。



<http://www.pref.ishikawa.jp/>

石川県のホームページ。

B O O K (独断的おすすめ本)

地域づくりに参考になるかどうかは
読んでみてのお楽しみ。



玉村豊男『種まく人』●新潮社

フードピアなどで石川県をよく訪れている玉村豊男さんも長野の東部町に移り住んで7年目。晴耕雨読の暮らしを楽しんでいる。実際は原稿や講演でかせいたものを畑に投資しているのが現状のようで、統計的にいえば2種兼業農家みたいな暮らしをしておいでだ。私たちの暮らしのありかたを読みやすい文章で考えさせてくれる本です。「種まく人」というタイトルも魅力的。



中谷健太郎『湯布院幻燈譜』●海鳥社

いまさら湯布院でもあるまいという意見もありますが、中谷さんは健在です。1月に亀の井別荘を訪れ、中谷さんのお話をうかがいました。初めて泊まった「亀の井別荘」のサービス、空間の良さに、中谷さんの人柄が現われているようでした。そんなわけで、フロントで売っていたこの本を土産にしたのです。「リーダーじゃなくシーダーだ」という矢幅治美のことばがひびく。

最近の地域づくり

[公募、参加者募集のお知らせ]

◆たつるはまふるさと写真コンテスト

テーマ:田鶴浜の魅力を写真で表現した作品を公募中。
締切:平成9年9月31日

応募先:鹿島郡田鶴浜町田鶴浜里部6番地

田鶴浜町役場総務課内 写真コンテスト係
TEL 0767-68-3131

主催:ふるさと21青年塾

◆アメリカ研修参加者募集

海と港を活かしたまちづくりを進める
七尾マリンシティ推進協議会の第12回目の研修旅行。
期間:6月25日~7月6日
費用:65万円(予定)
主催:七尾マリンシティ推進協議会
七尾市三島町70-1 七尾産業福祉センター7F
TEL 0767-53-1044

情

報部会が中心になって制作を進めてきた情報誌の実験号がようやくできました。発行が遅くなり申し訳ありません。タイトルの「My Page」は仮称ですが、地域づくりに活躍されている皆さんの情報誌であるという気持ちでつけてみました。いろいろご意見をちょうだいして、よりよいものにしてまいります。原稿や企画など、アイデアやご意見を遠慮なく情報部会メンバーへ事務局までお寄せ下さい。(毎田)

地

域づくりは面白くないと続かないし、盛り上がりがない。それが1年間、地域づくり推進協議会に関わってみての率直な感想です。そのためには、活動の核になっているメンバーがまずポジティブな発想を取り組んでいることが大切ですね。面白い人、魅力的な人のまわりに人が集まる。当り前のことかもしれませんのが、未来を見つめ、そして肯定的に生きることです。そんな人が増えると魅力的な地域になるのでは。(高峰)

石川県地域づくり推進協議会

情報誌創刊準備号「My Page」

1997年3月発行

●発行

石川県地域づくり推進協議会
金沢市広坂2-1-1 〒920-80
石川県庁総務部地方課
TEL 0762-23-9057
FAX 0762-23-9486

●編集

石川県地域づくり推進協議会 情報部会



編集後記